

子どもの精神分析セミナー（「Françoise Dolto, Séminaire de psychanalyse d'enfants
Tome 1, Éditions du Seuil, 1982」）の試訳

第一回

子どもはどんな真実でも受け入れることができる。

生まれを否定された子、アランの症例。

すべての子どもは生みの親を心のなかに持っている。

セラピーで、子どもにどう自己表現してもらうか。

性愛を持たないで子どもたちと遊ぶ術について。

赤ん坊は母親と会話する以上に、赤ん坊どうしでコミュニケーションをはかっている。

参加者：お母さんが子どもにその出生にまつわることを明らかにしない、という事実は、なにを意味しているのでしょうか。

フランソワーズ・ドルト：言ってしまったら子どもになにか害がある、と思っているか、それがお母さん自身の倫理にもとることがだからなんでしょう。

子どもには真実を受け入れる力がある、という信頼をお母さんが持てるようにしてあげることが、われわれの仕事です。たとえば子どもをまえにしてお母さんがあなたにすべてを打ち明けるような場合、あなたは子どもを証人と思って、こう言ってあげなければなりません「いい？君のお母さんは君をまえにしているけど、でも君には知ってほしくないと言ってるのね、君のお祖母ちゃんが売春婦だったということをね。君は売春婦ってなんだか知ってる？これは頼んできた人を欲しているふりをして、体を貸してお金を得ている人のことなの、これはほんとに面白いことではないのよ。君のかわいそうなママはこれは良くないことだと思っていたの、というのはみんながそう思っているからなのね。これは難しい、つらい仕事で、とても古くからあるお仕事なの。君のお母さんのお母さんはそうやって生活費を稼いでいたの。お母さんにとってはそれが辛かったの、たとえお祖母ちゃんについて世間が言っていることが本当ではないとしてもね。ところで、いい？今私たちがここにいるのはお祖母ちゃんを看病するためではないよね、お母さんはあなたのために来たの。分かるかな、お母さんはでもやっぱりいいお母さんを持っていたのよね、優しくて、お母さんを育てるため、自分が出来ることをして生活費を稼いでくれたの。お祖母ちゃんがいなかったら、お母さんはここには存在しないし、そしたら君みたいなカッコいい子もお母さんは持てなかったでしょうねえ。」

分かりますか、われわれの仕事は、お母さんが祖母とどんな関係を持っていたとしても、お母さんがもういちど自己愛を取り戻すように導くことにあります、なぜならもうお分か

りでしょうが、彼女がいまは母親なんですからね。

いまわれわれが相手にしているのは、子どもに生育力があり、母親もそこにいて、しかしながらじつは母親が自分の母親との関係を嫌っているようなケースですが、これこそまさに子どもが今後欠如として、あるいはまた負債として、背負っていかうとしているものです。名誉を回復させるような言葉によって母親のこころの係争を取り除くことをしない限りは、そうになってしまうでしょうね。

参加者： まさにそのとおりで、子どもの前では言わず、子どもがいないときにだけ言うという両親がいるんです。それで私たちは畏にはめられてしまうんですが。

F・D： 畏にはめられるですって！そうではないですよ・・・、両親にこうっておけばいいんです「子どもが質問してきた暁には真実を告げなければならないということをご理解いただけないのなら、心理療法をすることは問題外です」。それに両親がそれを受け入れないということはとても稀なことです。ぎゃくに、もしわれわれが両親のその策略にはまって、その罪作りでナルシズムを剥奪するような幻想を支持してしまうなら、われわれはもはや分析家ではありません。子どもにその真実を言わないことに同意するならば、真実が子どもにとって良くないもので、したがってわれわれ自身もそれを受け入れることが出来ないのだと、認めたことになってしまいますよ。

そんな態度を取っていると、真実のなかにこの子どもを確立するものの一部が、じつは時限爆弾なのであるというような両親の思い込みに引き戻されてしまうでしょう。でも分析家にとってはすべての試練はひとつのステップですし、去勢はどんなものであれ構造化をうながすものなのです。

参加者： でも、親が子どもに明らかにするのを望んでいないことがらについて、私から言うてしまう権利は自分にはないように感じることも、よくあります。

F・D： もちろんです、しかしだったら子どもを心理療法にむかえてはなりませんよ！もし初期の契約時に子どもをだましているとあなたが確信するならば、子どもを治療にむかえることは出来ないのです。ただ、ひとつケースを思い出します。6回面接をしたところでついに一ドラマチックな面接だと思ったようですーその母親は子どもに出生についての真実を打ち明ける許可を、私に与えてくれました。それは精神病のような状態から子どもが抜け出すのを助け、結果としてその子は重いヒステリーの神経症で済んだのでした。

よろしいでしょうか。そのケースは女の子のケースでしたが、一度もそれまで出生について質問したことがなかったのです。彼女は母親の本当の子どもだったのですが、当時の母は娘気分の抜けない母親でした。母親は彼女を施設に預けたのですが、「捨てたのではない」子ども、つまり13歳になるまでは誰かの養子にはなれない子どもとして預けました。

母親はそのあいだに結婚して、9歳と6歳になる二人の子どもをもうけ、夫が願ったので、実の娘に再会して養子にしたのでした。娘にぜひに自分の実の娘であることを知られないことを、この女性は望んでいました。そしてまた、この子も一回も出生について問いを発したことがなかったのです。母と娘は瓜二つで、みんなも似てると思い、娘もそれを喜んでいました。「自分が養母にこんなに似てるなんて、ラッキーだなあ！もっとも私が彼女に似てるから、それで私を選んだんだろうな。」

彼女が13歳になってから、つまり養子縁組が可能な年齢になってから、母とその夫は養子にむかえたのでした。というのはその時になってやっと夫に預けている娘の存在を、打ち明けたからです。

参加者： 11歳半になるアランの話をしてします。彼は血友病の子どもをみるクリニックの受け入れ面接で、私のところにやってきました。ひんぱんな鼻血をとまなう血液の病気に苦しむとともに、学校でありとあらゆる失敗をやらかしていました。病気が分かったのは7歳のときでした。母親が言うには、アランは過去付き合っていた男の息子だが、生まれてからは一度も会っていないということです。アランが3ヵ月半のころに、彼女は今の夫と出会いました。アランが1歳と3ヵ月半のときには新しい男の子を、それから女の子も妊娠して、この女の子はいま6歳になります。

アランは自分のほんとうのお父さんが誰なのかをまったく知りません。アランを受け入れるまえに両親と心理療法的な面接をもつ必要があるかどうか、考えているところです。なぜなら入院にともなうリスクのうちのひとつに、家族の秘密を維持するということがあって、これがみんなにプレッシャーを与えているからです。どう思いますか？

F・D： でも、完全に足りないものがあります。それはアランの妊娠と、最初の9ヶ月の話です。この期間はあまりに大事な期間で、9ヶ月で、子供の構造の基礎が確立されると言ってもいいくらいです。まさに立って歩いたり離乳させられたりするころですから。

それからもちろんアランは知ってますよ、義父がお母さんと結婚したのとどうじに自分とも結びついたのでということね。というのは彼は母を以前は持っていなかったのです。以前はアランと融合状態にある一人の女性がいただけだったのです。つづいてある男性と融合状態にある一人の女性が存在し、さいごに二人目の子どもが誕生してからやっと、アランは融合状態を解かれたというわけです。ここに至ってやっと、母親は彼の妹のような存在であることをやめてくれたのです。

それから、私はこの子に彼の歴史を言うことについて現実的な問題があるとはまったく思いません。彼は知ってますよ。だからシンプルにこう言えばよいのです「あのね、君のお父さんは君が9ヶ月のときにやってきて、お母さんはそのとき名前を変えました。まだ学校に君は行ってなかったけど、お母さんがそれまでとは違う名前と呼ばれたのを、よく聞いたんじゃないかな。」というのは、9ヶ月の子どもにとって、母を形容することは

というのは、とても重要だからです。

母親によって出生を否定されたという事実は、ある人間存在をたいへん脆くしてしまうものです。たとえばですが、われわれは捨てられた子どもにそのちからのすべてを再びあたえることができるのは、その事実を修復されることによってこそなのです。

子どもは原光景を与えられなかったという理由で、つまり世界に存在することの誇りを与えられなかったという理由で、死んでしまうこともあり得ます。生まれるまで子どもを引き受けることはしたが、それ以上のことが出来なかった、生んだ後捨ててしまった、そういう両親を持つことことは、なんら貶められることではありません。そうではなくて人びとのする投影の対象一価値をさげるような一に子どもがなってしまうことが問題なのです。父親や母親がなくても子どもがちゃんと育ってしまうと世間というものは嫉妬するものだとして、言ってもいいかも知れませんね。わたしたちを育ててくれる人物は、情動面での父親、母親たちであり、言語的な交換においてもっとも重要ですが、彼らは生みの親のような、生体の次元に属してはいません。第一次ナルシズムの生体の次元は出生するとすぐに、また遺伝子のなかでも関わっています。われわれ精神分析家の仕事は、あの原光景の真実について会話をすることであり、これが生きる力とコミュニケーションする力とを、取り戻させてくれるものなのです。

アランはすべてにおいて行く手を阻まれています、なぜならお母さんは彼を、彼女が愛し、かつ彼女をむかし裏切った男の、けれどもまったく真正な子どもであるとみなしたくはないからなのです。お母さんはこの子を、今もなお裏切りつづけている男のようにみなしています。

参加者： 私はある捨てられた子どもに、その両親についてや育児放棄について話し、また施設に入れられた理由を話すと、彼はこう言いました「僕の両親は意地悪なんだ。」、私はそんなことはないと答えたんです「だって君を産んでくれたでしょう。それはやっぱり愛のあかしですよ。その後で、君の世話をすることが出来なくなってしまったのよ」と。でも他になんと言えばいいのか、私には分かりませんでした。

F・D： まずはじめに、彼はあなたにこう言わなければならなかったのです「僕の両親は意地悪なんだ」と。あなたからなにか言われてしまう前にね。わたしだったらすぐにこう言いますね。「じゃあ意地悪な君の両親と、産んでくれたお父さんを絵で描いてみてちょうだい！生きることは意地悪なことなのかな？生きることが意地悪なことでないなら、ご両親は君に生きることを与えてくれたんだから、彼らもまた意地悪じゃないでしょうね。」この子にとって「意地悪だ」という言葉がなにを意味しているのか、絵で表現してもらうことがぜひ必要ですよ。意地悪というのでよく描かれるのは犬です、たとえばそれは子どもを接吻でむさぼり喰うような、長いこと子どもを嘔むような母親のことでしょう。でもその子だけが、それが何であるかをあなたに言うことができるのです。

いずれにせよこの子は、生みのお父さん、お母さんの再現です。彼は、生き延びるために本当の両親を必要とする子どもたち以上に、真正な生命の再現なのです。多くの子どもたちが捨てられたために死んでしまう一方で、この子は両親がいなくても生きつづけることができるほどの生命力を授かったということを、証しているのです。

参加者： 両親になにか意地悪なところがあるんだろうと考えて、でもそれをどう彼に言ったらいいのか分からず、私は身動きできないでいました。

F・D： もしあなたが分析家であるなら、すべきことはひとつしかありません。子どもに、その子が言っていることについて、ことばとは別の方法で、表現してもらうことです。アランの症例では、「生みのご両親を描いてみせてちょうだい」と言った後で、こうも言っているかも知れません「いずれにせよ、唯一たいせつな両親は、私たちがこころのなかに持っている両親なのよ。彼らは意地悪じゃないわよね、だって君のこころのなかにいるんだから」。

参加者： どうしてあなたは「ことばとは別の方法で表現させる」と言うのですか？

F・D： ことばとは別のものという、たとえば絵とか粘土、音楽ということになります。

わたしは以前、描くことも話すこともできない男の子を治療したことがあります。わたしは当時ピアノを持っていて、その子がピアノに触るのが好きなことを知っていたので、「君は音楽でなにか言うことができる？」と言いました。彼のお父さんもお母さんも音楽をやっていたのですが、彼は両親に従いたくないために本格的に習うことは拒んでいました。じつのところ、彼は両親以上に立派な音楽家でした。それで、頭に浮かぶイメージすべてをピアノで弾くことで、わたしと分析をしたというわけです。ときどきわたしは自分の感じていることを彼に伝えました。するとそれが彼にとって正しい場合は、ただちに彼は付け加えます「うん、そのとおり」。もし間違っていると、彼は動揺もせずに弾きつづけるので、「ねえ、わたしには分からなかったの。君のイメージはなにを表現しているのかな？」と言います。すると彼は弾きながら、「黄色—赤—四角—とがってる。」と言うのです。これは完全に抽象的なものでした。彼はとても頭が良かったのですが、あらゆる水準で倒錯していました。

人間にはことばとは別の表現方法があります。ことばは場合によってはあまりに多くの間違いですでに汚されてしまっていて、子どもは本当のことを言うのにそれを使うことができないでいます。というのはその場合彼らにとってはことばは嘘になってしまうからです。

子どもは身振りやポーズ、絵、粘土、音楽によって、みずからの幻想のこころのイメー

ジを表現します。すべての人間存在は聴覚的、味覚的、臭覚的、触覚的、視覚的幻想によって象徴化します。しかしことば以外の方法でも幻想を表現することができるのです。赤ん坊がやっているのはまさにそれです。

あなたが語ったケースでは、こう自問自答してみなければならなかったでしょう。「意地悪だ、という形容詞の背後にあるのは、どんな幻想だろうか？」われわれ精神分析家たちの仕事はつねに、主体にべつの方法で自己表現してもらうことにあるのです。つねにまやかしや間違いを担っているような言語を母国語とする子どもたちについて思うのは、使い続けるうちに自分たちになされる投影のなかに、罨のなかにどうしてもはまってしまうということです。

「意地悪だ」、これはたぶんこの子がいつも自分について言われてきたことなのでしょう。

参加者： そのとき私は、わたし自身についての何かか、あるいは例の「悪い母親」にかんする何かについて連想をめぐらせていました。

F・D： ああ、この悪い母親という形容詞ねえ！このことばは本当に精神分析家の世界に悪い影響を与えてくれました。悪い母親など存在しないのですよ。良い母親たちというものが悪い母親たちが存在している、と投影をおこなうのは、ある社会階層についてなのです。でも母親は母親にすぎません、そしてなによりもまずある人物を母親とするのは、その子どもなのですよ。

それでは子どもがその人を良い母親、または悪い母親、とするのでしょうか？馬鹿げた問いです。もし悪いものが人が捨てるものをあらわすなら、すべての母親は捨てられます、よって悪いもの、ということになります。乳を人が取り入れます、でも乳をちゃんと捨てなければならぬこともあるのです。ですから、人が取り入れれば、これは良いもの、おいしいおいしい、もし良いものでないなら、人はそれを捨てて、これは悪いもの、うんちとなります。だからママはおいしいおいしいとうんちとを交互に繰り返すのです。それが人生なのです！母親は人生の仲介者であって、だからその人生の流れによって母親は横断されるのです。

もし受けとるなら、これは良いもの、もし捨てたり放つなら、これは悪いもの、だれもがこの善と悪の分割を免れないのです。言うまでもないことですがすべての人にとって受けとったり放つたりすることがつねに重要だからです。そのあいだに、乳を利用することが重要にもなってくるわけです。

この乳は、では意地悪なんでしょうかどうかどうなんでしょう？これらすべてが強調されすぎたために、結局矛盾した状況にわれわれは至ってしまうのです。ママは子どもがうんちをするのに十分な食べ物を持っていない、だから彼女は不安になる、というような。子どもがうんちを出さなかった、意地悪だといって不安になるのが良い母親だということになります。もう誰にも何が何だか分かりませんね。

より理論的に説明してみましよう。母との関係は欲求の満足をとおして作られます。この欲求は、欲望、感情、身振り、模倣という言葉に伴っています。この欲求の満足を子どもは母親という泉で飲むのですし、それとどうじに子どもの身体が消化器官のはたらきによって育っていくのです。

参加者： 私が語っているケースでは、彼が「意地悪だ」と言ったんです。

F・D： 彼がそう言いました、でも彼はだれからそれを受け取ったのでしょうか？彼にこう尋ねてもよかったかも知れません「だれが言ったの？」あるいは「それはどんな感じ？いい人と意地悪な人とを描いてみせて頂戴」。

参加者： 第一次ナルシシズムの両親というのは、絵によって表象され得るものでしょうか？

F・D： ええ、渦巻きによってあらわされます。渦巻き、これはこころのなかに生きている親です。渦巻きが存在するためには想像界のある軸が必要です。渦巻き、これは力動であって、その軸、これは人生なのです。

参加者： 子どもの心理療法にあつては、あなたは絵による表象から、子どもを横断しているものについて働きかけるのだということを、たいへん強調しておられます。じっさい私が子どもに絵を要求すると、私を喜ばせようとして描くか、そっとしておいてほしいがために描いてくれるような印象を持ちます。そんな感じは持たれませんか？

F・D： でもかならず絵を要求するのはどうしてなんですか？それにはどんな理由もないのです。あなたとともにいる子どもは、すべきことをするだけです。

参加者： それでもこう言うものなんです「絵を描きなさい、それがきまりです」。子どもがそこにいるのはなにをしてもいいからではないんです。すべてがゆるされているわけはありません。

F・D： でもわたしには分からないんですけどねえ。どんなときであれ、あなたは子どもにその子がすべきことを指示するべきではないですよ！子どもはすべてをやっているわけではありませんが、すべて言うことはゆるされているのです。言うこと、これは自分を表現するという意味をしています。「あなたはことば、粘土、絵でもって言うことができるわよ」というと、子どもはとてもよく理解するものです。でもそれは幻想を異なるやり方で表現する手段にすぎません。問題についてあなたと会話するために、その子はそこ

にいるのです。

参加者： はい、でも私が言いたかったのは防衛体制としての絵の利用にかんすることでした。

F・D： ああ、それにかんして言うなら、すべては防衛体制になり得るのです。たとえばことば、これもすべてははじめに抱いた意図にかかっています。あなたと会話したいと望んだかどうかはね。じっさい、大人たちが子どもに会話を強制し、むずかしい状況になっていることはよくありますね。

参加者： あるときは子どもはものすごく不安がって、絵を描かないで身振りで満足してしまいます。

F・D： でも身振りはすでに内的な表象の結果ですよ。それはすでにそうなのです！子どものなかには面接のときにおもちゃを持ってくる子もいるでしょう、いいではありませんか？彼らはもうひとりぼっちではないのです、おもちゃと一緒にいる、それだけのことです。こういう日はあなたに何も要求してこないし、あなたも何も要求しません。これはあるサインとしてとるべきもので、のちにたぶん意味が明らかになるでしょう。それにこれは母親たちが不安なときにやることでもあるのです。彼女たちは自分のおもちゃである子どもを連れてきて、あなたに預けて立ち去ります。じつは話さなければならないのは、母親たちのほうなんですね。しかしまあ、ほんとにわたしはあなたがおっしゃるように絵や粘土を押しつけてやらせるようなものとは思わないのです。精神分析はあらゆる手段を使うコミュニケーションです。たとえば子どもが地べたに転がるなら、これもひとつの会話ですよ。

参加者： でもその場合はほんとうにどうしていいか分からないのです！

F・D： どうしていいか分からない、それは何も意味しません。だいじなのは、あなたのなかで子どもの行動が生んでいるものを感じ取って、伝えることです、「わたしはこれをこう感じるけど、それがあなたが言いたいことなのかどうかは分からないわ。君はどう思うの？」とね。

参加者： いつもわたしたちは解釈の表明について話しあっていますが、子どもの心理療法ではひとつの解釈にまとめていくのが難しいような、とりとめのない要素の集まりが存在しているのだと思います。こねられた粘土とか、指にはさまった鉛筆、床に四つんばいになる、ゴミ箱をひっくり返す、机の明かりで遊ぶ、出ていってしまう、戻ってくる、

というような・・・。これらの場合にひとつの解釈を与えるということについて、どうお感じになりますか？

F・D： そうですね、まず言えるのは、そういうときに解釈するかどうか分からないということです。文脈を分析しなければなりません。でもじっさい子どもの精神分析家であることは、大人の精神分析家であることよりずっと難しくて込み入ったことですね。

参加者： その点についてやりとりが本当に少ないのです、とくにここでは。

F・D： でもいまこの時点で、あなたはなにについて話しているんですか？まあいいでしょう・・・治療の初期にだいじなのは、そこにいる子どもの話をなぜあなたが聞くつもりなのかをきちんととらえて、母親にちゃんと言うことです「もしあなたの子どもが興味をもたないばあいには、お子さんのためにお母さんが話しに来てくださいね」。それから子どもを注意深く観察します。たとえばもし、子どもが部屋にいそいで入ってなにか物を引っ繰り返すなら、引っ繰り返すことでなにかこころの無秩序をあらわしているのです。ある中身を引っ繰り返すというのは、じっさい相当なものです。よろしいですか、あなたがその子に伝えなければならないのはそれなのです。あなたの仕事は彼がしていることをことばにしていくことにあるのです。「君はいそいでやってきて、中身を引っ繰り返しちゃったね。これはいろいろ入ってるかごで、床に散らばっちゃったよ・・・」あなたは子どもと自由に連想して、なにかその子が考えさせることをしたときには、こう言いましょう「いま君がやったことをみると、なにかわたしに伝えたいことがあるように思うんだけど・・・君が言いたいことを知っているのは君なのよ。わたしは君がしたことを見ていて、それがなにか言いたいからなんだと分かるだけなのよ。」

参加者： とても混乱した子どもとやっていると、面接がほんとうにだんだん辛くなってきました。これはあなたにも起こることでしょうか？

F・D： もちろんですよ。分析が進めば進むほど、じっさい子どもは面接ではより荒れてきます、より「床に散らばった」り、より太古的興奮を表現したりします、たとえばですがそこで身動きがとれなくなっていた椅子の脚のあいだで再生するまでね。どうじに社会、学校では、だんだん適応していくのです。

分析はそんなふうに進展するのです、これは子どもの抑圧されたものが回帰するおかげです。抑圧されたものの表現のあり方が社会では許容されないからこそ、子どもはあなたといるときにそれを表現しなければならないのです。それは彼が生きるのを助けますし、こころの真実性というものを保持する助けになります。それはおそらく、まさに彼が引っ繰り返してしまったものを保持することにあるのでしょうか。われわれはそれについては何

も知りませんし、われわれがそこにいるのは、観察したり感じ取ったりし、また転移を引き受けるためなのです。象徴的な支払いが不可欠なのは、そういう理由によるのです。象徴的支払いのおかげで、子どもがほんとうに来たくて来るのか、良い性愛化を自分に贈るために来るのか、なにか作業するために来るのかを理解することが出来るのです。

たとえばある子が支払いを持ってくるのを拒むけれども面接は受けたいと欲しているとき、こう言ってみましょう「次回は石ひとつじゃなくて、ふたつ持ってきて払ってね」。あるいはたとえば「今日君は石ふたつ分負債を負ってるのよ。それを描いてみてちょうだい」。あたかも大人にたいして書面で負債を認めさせるようにやるのです。

もし拒むばあいは、こう言います「あのね、君は石をふたつわたしに出来ないといけません。それがないと、わたしはあなたの不幸を聴くことはもうできません。もしほんとうに君が自分の不幸を言いに来たいなら、また来なさい。でも今日は話を聞き続けることは出来ません。なぜならわたしは仕事をするにあたって、石を持っていたいからなの。それがないと、わたしは仕事をしないのよ。」

これは彼にとっては、あなたに話をしない自由があるということの完全な証明になりますし、あなたにとってもまた、彼の話の聴く仕事をしない自由があるということの完全な証明になります。

これは治療の中で節目となるような時です。もしもう来たくなければ、彼はもう来ないでしょう、そのときは彼の発達を心配している人物とあなたは仕事を続けることになるでしょう。子どもはいつも正しい判断を下すものです。

参加者： 面接で作ったものを、そのつぎの面接でも子どものそばに置いておかないと
ならないでしょうか。たとえばまだ描きかけの絵とか？

F・D： どうしてそう感じたのですか？

参加者： 私はそこにいたのです、子どもが紙をとって言いました「僕まだ描き終えて
なかったんだけど。」、それからまったくおなじものを描いたのです。それで質問しました。
原則的には、どうすべきでしょうか？

F・D： わたしにはまったくなにも分かりません。子どもによります。ある生産物が
うんちをすることとイコールなのか、それともその子があらわしたかったのは幻想なのか、
われわれには分からないのです。

参加者（男性）： それに絵が終わっていないと、だれが言ったんですか？

F・D：　そうですね。彼は描き終えてないと言いましたが、あなたといるときにあらわさなければならないことはあらわし終えたのですし、できるところまでやったのです。いずれにせよ、それは決して終わらないものなのです。でも、繰り返し言いますが、だいじなのは絵じゃないんですよ、だいじなのは彼が言わんとしていることなのです。たしかにたまに子どもがおなじ絵を描き直すということがありますね。でも一週間後でもそれをやるとなると、これはもうまったく二番煎じというかんじです、子ども自身の反復です。

そういう場合は、こう言ってみたらどうでしょうか「君は生きているんだから、こころのなかに毎回新しい絵を持っているでしょう。でも君は毎回絵が終わらないのよね。じゃあ君がだれかといるときに絵以外でぜったいに終わらないものは何なのかな？」。

おそらくは彼はあなたといて自分を表現する時を遅らせたいと欲している、というところでしょうか？分析しなければならないのは、彼が反復していることがらです。彼は離乳が早すぎたのでしょうか？早産だったのでしょうか？そんなことは知ったことではありません。分析は反復しているものを探すことにあるのであって、「君はこんなふうにしましょう、それを続けてもいいですよ、この後もつづけてもいいわよ、・・・」などと言うことにあるではありません。あまりに早く離乳させたからと言って10歳になる子どもに哺乳瓶をあたえるのは良くないです、そのせいで彼が発育不全になったのだったとしても、良くないですよ。

参加者：　子どもがいっしょに遊んで欲しいと言うとき、どう対処したらいいのでしょうか？

F・D：　遊ぶのが彼自身であるなら、彼はなにをして欲しいと言うんですか？

参加者：　よくあるのは二つの文字とハイフンを使った遊びなんです。

F・D：　片方の文字、これはあなたで、もう片方は子どもです。彼はふたりのあいだをハイフンで結んでいるのです。

参加者：　あるいはなぞなぞをします。「緑色のもので、木にひっかかっているものってなんだ？」どう答えたらいいのでしょうか？

F・D：　「なんて答えたらいいのかな？わたしは遊ぶためにいるんじゃないんだけど。」と答えたらどうでしょう。

参加者：　彼は「先生は答えたくないんだね。」と言いますよ。

F・D： 「そう、答えたくありません。君がお金を払うのは私が君に答えるからではないし、わたしも君が答えるからといって君にお金を払うわけでもないの。わたしは君のころのなかでうまくいっていないことを聞くためにお金をもらっているわけなの。ところで君はまだだれともいっしょに遊べないの？」よくあるのは、子どもたちが人形をもって二人の人物、母と子の遊びをすることです。

参加者： そのとおりです、彼らは結局はひとりで遊んでしまうんです、それでわたしはすごくストレスを感じます。

F・D： ストレスねえ、それは性愛化に抵抗しているからですよ。しかしお買い物ごっこという遊びがありますね、これはとてもだいじな遊びです、というのは口唇期と肛門期の遊びだからです。もし小さい女の子があなたにこう言うとしましょう「わたしは**le boucher**さんなの・・・」彼女が来ているのはこのためなのです、彼女はそういう状態なのです、つまり彼女は**bouché**がれてしまっているのです・・・そしてあなたは彼女の買い物客になります。「マダム、なにをお探しですか？」と彼女は言うでしょう。わたしだったらモリエールの登場人物のように、小さい声で「なんて言ったらいい？」と彼女に聞きますね。「これを2切れください、と言って」と彼女は言うでしょう。そうしたら「これを2切れください。」と単調な口調で言いましょ。彼女があなたに教えてくれたのとまったくおなじことを、あなた自身の感情をいっさいくわえずに言って、ふたたび小さい声で、こっそりと彼女に訊きます「お客さんはつぎになんて言ったらいいの？」。たとえば子どもが「でもお客さんは先生でしょ、わたしには分かんない」と抗議したとしても、説明するのです「でもわたしは馬鹿なお客さんなの、だからどうしたらいいのかがあなたが教えてくれなくちゃ」。すこしずつですが、事態は進展します。ついにはあなたを利用しながら、彼女が遊びを作るようになり、あなたは分析家として、その遊びがなにを意味しているのかを説明するために彼女とそこにいることになるのです。これはつねに口唇的かつ肛門的な遊びです。支払いがおこなわれないことが多いです。商人は商品売ること満足し、お客は払わずに立ち去ります。

子どもの多くはあなたに払えとは言いません。だからあなたのほうからいつか言いましょ。「ほんとうの売り子さんたちもこんなふうだと思う？」金銭の支払いと価値について教えて、ひとはなににも払わなければなににも得られないのだということを子どもに学んでもらいます。この遊びはべつのがらに通じる遊びなのです。小さい女の子のケースを思い出します。その子は「お客さんはいつもたくさん買っていくのよ」とわたしに言いました。それで、「なんでそんなにたくさん買っていくの？だれのためなの？」と訊くと、「だんなさんのため！」と答えるのでした。それでわたしは「そのお客さんには何人子どもがいるのかな？」と訊いてみました。けっきょくいつも子どもひとりぶんだけ、品物が足りないのでした。

じつはこの子は自分の母親の役をこの客にやらせています。両親には現実には4人子どもがいたのですが、買い物客はぜったいに3人分しか買いませんでした。彼女は一番下の弟を存在させたくないこと責任を、わたしが演じる買い物客に負わせているのです。

これは出発点にすぎず、その背後の連想を解説しなければなりません、あるいはまた、現実の否定だとも言えるでしょう。現実が主体に想像的な生を強制的に阻むときには、いつもこのような主体による作業があります。主体はそれ以上進めなくなると、教育者たちの意志に従順だけの存在になってしまいます、ほんとうに生きている者であり続けられないのです。

でもぎゃくに、主体の想像界がインフレーションを起こし、現実を否定してかかるならば、主体はやはりまた日常生活に適応出来なくなります。というのは日常生活とは、現実感覚とそれをとりまく想像的な生を保つこととを、両方どうじに要請してくるものだからです。

われわれの仕事はつねに、子どもにとって理解しやすい象徴的な表現を彼らが使えようようにすることにあります。おかげでべつの人間たちと出会うことが可能になり、なにか交換したり会話をしたりできるのですし、彼らが周囲の人たちと出来ないでいるのはまさにそれなのですから。

たとえば赤ん坊はじぶんの欲しいものすべてを母親に会話で伝えることは出来ません。

われわれは緑の家¹でその証拠を持っています。そこは子どもの社会化の場所です。

赤ん坊はお母さんとする以上に赤ん坊どうしで会話を交わしています、ほんとうに喜んでね！彼らにはこの、特殊な会話が必要なのです、というのは彼らはおなじ聴覚的周波につながっていて、おそらくはおなじ幻想にもつながっているからです。われわれは3ヶ月の子どもをもつやきもち焼きの母親たちをたくさん観察しました。赤ん坊たちは横並びで、かえるのように床にねて、お互い鳩が鳴くようになにごとかを伝えあっています。

驚愕しました。あるお母さんがその輪のなかに入ろうとするとすぐに、彼らは瞬時にして黙るのです。赤ん坊の発達水準ですら、母親がそうとは知らずにすでに禁じている彼らの幻想を伝えあう手段を持っているということの証拠です。お母さんたちは現実を要求するので、赤ん坊たちは幻想を会話する必要があるのです。あるいはまた、彼女たちはみずからの幻想、子どもやほかの子どもたちの幻想とはちがう幻想を押し付けようとするからかも知れません。

お買い物ごっこのなかで、共犯性をともなうこの手の遊びのなかで、子どもが探しているのはなんですか？それはその子自身の水準にいる誰か、なのです。われわれがそこに位置しなければなりません、でもそこにわれわれの幻想を持ち込むようなことはぜったいにはなりませんよ。われわれは分析家であることにとどまるべきなのです。子どもがどの点で現実を否認しているのか、またぎゃくに、どの点で現実的でありすぎるのか、その子を取りまく世界がそうであるようにその子がサディックでいることを課しているものは何なのか、われわれは探さなければなりません。

¹ パリ 15 区の Meilhac 通り 13 番地

参加者： あなたがわれわれが職業を学ぶにあたって、子どもからはじめるのではなく大人からはじめなければならないとおっしゃるのは、そのためなんですね！不幸なことに、通常おこなわれているのは逆のことですが。

F・D： 残念ですけど、そのとおりですね！子どもが両親の探知機であるということに起因する、それこそまさに社会的な事実です。もちろん、子どもたちのなかには自身固有の問題をもっている子もいますが、それも両親のもつ問題によって水増しされているものです。

参加者： けっきょくあなたは、子どもの心理療法家というわれわれの役割をどう定義なさいますか？

F・D： われわれの役割は表現されている欲望を正当なものとして認めること、それから日々周囲には表現できないようなこの欲望について、子どもが反復しているものを探すことにあります。それからまた教育的な雰囲気は課してくる超自我のまわりで抑圧されてしまった欲望群がありますが、この欲望群をとりまく情動をふたたび見出さなければなりません。情動が表現され得なかった欲望の衝動は、直接的にであれ、迂回されたかたちであれ、子どもの身体機能と観念形成の機能とを混乱させ、不安を引き起こします。これはフロイトが『制止・症状・不安』で述べている定式そのものです。子どものこころのなかで起こる制止は生体機能とその成長とを阻むところまで行ってしまうのです。われわれの仕事はそれらすべてのあいだの行き来を確立しなおすことにあります。でも正常化させることではぜったいにありませんよ、それはなにも意味しないのですからね。

われわれの仕事はあの想像界と現実とが表現され、ほどよく共存することを可能にすることにあります。想像界と現実とは、ふたつでひとつの矛盾のようなものです。われわれすべてがこの矛盾を引き受けなければなりませんし、まさに象徴的な生によってそれを引き受けるのです。象徴的な生、と言っても、ことばにされているものだけとは限りませんが。

すべては言語の問題なのです。